誹諧 おくれ双六 全

911.3
オ

昔此国ゝ自由かきいまたに御
もの並明暮悦め古め
あさ婦はいきみなあゆ況上
源三と名無く其同ま社
世すむへていちゝ重なれん
佛のきとわもかくやと来
四流その字と事新も
国其の所也と云ふらん心安

花の都より二年三とせ越方
はこゝかしこに今俳諧の流
に踏まよひ昔より衛
新しき流れにうつる人
を流ぬき四季折々の俳諧を
得るとも増先達の便
となく源にも目に叶
はぬ句共侍是を後双六と

名付ぬ 初心にはむかしの
発句を志し治に思出
独吟はちゝのさくらが
枝をたわめし候

撰者出羽国尾上
残月軒清風

延宝九年
初秋日

元日

思ふ事万代の初ば松の調　京住井狩氏 友静

若あまは神代の鮑ぞ念ひき　同住 常矩

今朝は玉年花物数俳諧師　同住 高政

いはば添生山依菴の意を若初　宗治

清代に喜初上鶴江戸侍　政長

うら白や的の初鶯やいふへく　江戸 幽山

相生の路ふ世の代安し一州の森　同 言水

江戸山王溜池の雛まで幾春　江戸 宗言

筆始先雛を畫(エガキ)けり　同 岑思

雛日暖之大和移し直翔　同 立詠

沛代は雛を遊ぶ月代姿　同 立吟

神紙の新箋万代まで和歌の国　檀林 西安

亀鶴老門に来生とも也　江戸 一松

上河東は沛商賜儀四方まで　同 山文

氷の箋代のかゞみさそ初　同 宗章

年比色や白河さす子入哥枕　高能氏 一栄

蓬莱や[illegible]海　羽州 風流

三[illegible]　同 吟水

[illegible]　同 [illegible]稲

[illegible]天の[illegible]　同 [illegible]

[illegible]　同 一[illegible]

[illegible]　同 [illegible]

[illegible]　同 [illegible]

蒼朮蔵山や白くぬり立　正利

菖蒲や神代の梅毫二柱　光也

木刀で岩も埋木いそ湯の者　佐久日 宗宮

人やむ高橋乃小汚組蓮葉　江戸堀 言滝

秋凍録末梃ぬくこはるとも　京 如風

女小篭京芸文字としは初境　江戸 調和

今朝の雑煮賀文字中北蔵譜也　清風

居士が娘寶は縄も捨はらん　言水

宝引や孫子郎まで海鬼妻　清風

子日

松膠やいらはてきまる初子日　友静

初芝居

木戸関よすま道路初芝居　嘉南

坊所集は接は初芝居　羽州 清秀

花の世末

蝶〻しや我に植る若菜　言流

山寺や若菜に備ッ隅の谷　芸甫

初連歌

左近に蝶は催して初連哥　言水

一順や竹の一ふし初連哥　貞久

表交入

神楽月は表交入へ殖き女郎し　江戸　其角

表交入や蛇の厨子紙菩町　蕉庵

御下句忌

安察寂好女ゆりの忌日哉　羽州　柳和

宮家も笑はき色白嵐　如柳

学や物理の林の未雪消山　乃靜

梅

先の梅ともし門を弓に杖　江戸　調賦子

深き子の玉のあれぬや梅は風　同　萱石

柳

気晴くハ風新柳乃月代(サカヤキ)也　京　唱人

まつ柳やもの執而の削眉　羽州　西通

気力なし幽来すそこまで柳　館林　戈乙

蛇柳や守活雅後め勢まれ　江戸　調孛

霞

駿河なるとし朧れ富士霞　江戸　一猿

灯四や昨ろ見え落霞　素甫

初午

正不穏や森の二代炬の初午　京葉　吉孟

厚なせ髪さ見山新乃能は拍子風呂　清風

佛別

けれてさ更ふ仏ハ既舎利　京　保後

まい二度出るく舎利を別れ　友静

猫恋

魁ゝ山に尾ひろてさへ叔這猫　一中
人の中はほめく猫の鼻柱　清風
　鹿角落
鹿の角落るや繪具畫嶽山　風流
　上巳附汐干
ゝ朝ぶ鮮橋原の汐干かわ　幽山
干鯛ゝや蒐の鱗ハゝ鯛乾魚　登石
はまの川見てやあきれん大塩干　江戸 正英

浴元[illegible]舟[illegible]入舎神の濱　愚道
汐干[illegible]鍬[illegible]神かん　秀穏
とも見え二[illegible]に[illegible]　柳和
[illegible]風[illegible]の淡会浮　素春
[illegible]鮮の[illegible]鯛の中より[illegible]　一笑
[illegible]を[illegible]の内裏[illegible]利　京 吉女
漂浴[illegible]干潟や鳶貝　言[illegible]
[illegible]ものとられ[illegible]信雄　清風

花

桜雲や下戸は見逆もの〻山　房治
舞嵩や布巾かゝく花の雨　洋雲
詠きハ如ま眼の泪え流　家幸
花咲て様ゟ地を見ぬ　滝水
よし桜ちゆく
花まるし我歌人の道理なり　京　松意
吉野坊る花世話きハ京の花　画観

花見して上戸下戸下なし世　京　定之
花色を拾合やもの宿　安治　露好
せめて若嫁の花嫁花　羽州　秀勝
花さらえ告れを忘し酒盛口　是道
此ころ波の枝　柳江
花の御前やて金　画英
さて四抑のもや時の　自真
酒中花に浪ち人の綿　一中

蝶の夢やおさし花も花逆　了静

法乃花や七宝荘厳の幕桂　以柳

年々や花も実もある金ほうし　一葉

女中方花は火をともしてうら　清風

桜　附桜鯛

雁食し龍を嵐伊勢桜　如柳

花鯛や吸筒の波京桜　自貞

男山のはしらま孫佐遅桜　一笑

七九良鯛花の暮味噌やから嘘　和州　吉笑

言葉雀

鳥寺ちかし嫁やおもうろ夕雲雀　京　渓雪

蝶

蝶〳〵ハ学の扇我ハ荘子かや　一葉

呼子鳥

黄舌ハ酒有て汝何有て呼子鳥　言水

唐人の座敷語や呼子鳥　遊川

紙子

野分して雲雀落るのあとも　恭遮

れ得よく思ひ出しけり紙衾　勢州　一雲

壬生念仏

日あしやこのうち友猿壬生念仏　友静

雑

妻恋や鶯拔の錦ちぐ漬　江戸　立端子

明穂の古草もかきまぜよ時酉　如柳

塩はきや首は明り鳴蝉の夕さ　言夕

妻恋や千日寺は夕暮の里　床深

茶寿生忌

世のうたた草幕はきを清き着　勢州　清風

妻くさとは思へせ冨士捨て　松有

夏部

更衣

左は女蛇は髪を絶つ水衣　言水

今日幾袷浴衣を揮翟ける京　遊蔓

さ紀蔵も被の濃紫や更衣　一栄

大名の知紀事あり更衣　瓢垣軒和时

青簾

蕉干し葉茎もひ黒や青簾　黄吻

糸脈や清浄を掘し寄すゝれ　清風

灌佛

非氣業帰法師如来生れけり　灑水

たゞ過ぎし流生涯産湯桶　宗宿

卯花

朝雀泊り定めん花卯木　言ゝ

鵜鳥

身を惜む育ぬ残まあとゝきぬ　宗呑語　千之

郭公渡りくる麦の友かも　桃香

一聲や嘶の如死期子規　友静

夕よは死ともはかなき江　重政

蛇の道へ跡なし鶯しる時鳥　玄笑

草花落るや油ひさしのかなき江　可静

婦よりはきゝいは宿すう子規　言斗

今日よりは蕨はきゝぬをといふを行子規　柳和

養蚕の里や入まする雛の島　一栄

山姥の声始きゝし郭公　如柳
顔をハ葉裏の山郭公　吉忠
跳来や耳ハ村雨郭公　任吾
延しも声ハ横雲郭公　清風

諫鼓鳥

諫鼓鳥や万歳聞て草籟　西英
道花の花離し諫鼓鳥　重政
諫鼓鳥や栖ハ浅間新花　不寄得

杜若

沢鱗も澱の押し杜若　清風

葵

蓊も茂る時めくあふひ草　友静

端午 附菖蒲

胴人形斬ゑく世も菖草　調和
力之人形肩すゑくれ菖蒲の兜　河内 房近
れそ垣濃新嶋の旗ゝ粽　言徹

思ひや女あやめ造の七所かな　言巳

かきつはた

抱とらハ亭主の鼻やかきつはた　京 信徳

かきつはた八橋れうし巣を起しけり　同 春澄

かきつはた庭のはね要石　一雲

馬下語や水のきはゆくかきつはた　西通

早苗

早苗の男女圓の父母なり　嬰娜

水鶏

源之丞水鶏を思ふ中立也　相山 友水

早松茸

喜安し檜(シキミ)折僧早松茸　言水

さしけれ天狗まゆや早松茸　伊勢 貞久

青梅

青梅や七のら女呼て浅れ糟　羽州 重之

まち崇茂

ラウ弄や二女の嘘乃下萌り　言雖

掃溜や柿木乃萌り　柳下狄

君子和く池の風情萌りけり　房名

蘇鉄山の芽や庭の河邊し
山世　對州 緑葉　粒夏

無名やさし所て飛行鳥　京 交雲

榛葉乃露や桜の飛鳥　晋中

女人ら眉や昭目と急く鶯篭　風流

鮎附鮨

武川ハラ和らの都見よ鮎や　言水

芳野あく……

相模川や耳はまりし鮎の鮨　了輝

蘇我乃船漕ひ鮎かつ川　對馬 流子

纏和

ところ世の人目氣遣ふ夜有　南都 良尚

夜の燕や蚊遣ふ乃亂喰　一栄

蚊附蚤

殿乃使ひはしるまちかね夕網　京　高政

蛤椎く此世の此まに賞碁　滝水

音高し碁の目いとし散衾　行宣

千孔漏や動く此指蚤も宝かな　幸良

暮まとし蚤を猫せしまかな　定之

夜もすから土地あ波ひし　友蝉

洗猫浪夜の清く涼も猫　一葉

句ひゆむ三山の霞や出蚕きぬ　姫柳

眼持や赤眉山の桜と麻　清風

板締や小袖の関の風の友禅織　同

夙　附小角豆

婚夙乃命の津もら嫉轉龍　愛女

車盈ず中や河童流す瓜の皮　風流

夙小屋や去年と避て納紙縄　石井　房弟

武士と石もとん目席机地乾迄　言雄

いは〻まで音替森のむさくや　山夕

雨ねるや汐満来れ小舩　西嶌　春水

白雨　附雲峯

白雨や草履を流す一の刀川　房章

雲乃峯見るや跡さん冷水売　房宕

舟楼して又飛く雲の峯　一加

土用干

土用干や木乃色ゐ衿衣裾　春甫

虫干や歌仙見まうか賀紀　南都　西任

丁や土用前賀れきれの夜川　清秀

納涼　附んた

蚊やりて家の川庭や納涼さ　勾崗　立吟

湯責や階子は勝と夕涼さ　調絶子

粗白和え水や絃姉棹の川　如舩

高足が緒捨の山や夜日照　言流

昆蘭樹や五百羅漢の下涼さ　友静

三條の橋書下
涼しや増田右馬の橋涼之　友静
汗涼しまれく古れ小羽織　青圃 圭風
下り坂口老井の水瀬海艸　了静
生涯やまの松山汗ぞ波　口青

雜

鹿射香に降神酒廻 国風薫る也　京 千春
玄亀米西孟乱燒の長絶　柳和

仲絵路渥まり霜さ姜 夕ぐれみても　春甫
風付日ょ詠にめ扇なゐ哉 御棧　恐水
拾作や葉ぶ竹のを江棧　言水
水揺色こ宮鱣の友たちん　巻圃
汀笑の玄齋泉水や川御棧　言巧
辻社冷水川ヤタちらん　友夕

一 蝿もなし五十帯ニ流世話稼川　藤呂子

秋部

立秋

豊穣来て雲伐払ひ今此風　西通

法橋雄舟の像にかくきを
一句の賛望まれしを

絵像の風帯軽し今朝の秋　忠山

南北へ冷風渡り利る乃秋　春滴

麦まきし畝の後々槐の風　鳥跡

乙見や秋の門は告ぬ縄簾　自交

白露や瀬の音静か宿瀧　激水

谷の扉秋蝕るも山下風　清風

星合

秋去た年の下摺菊すぬや　豊山

冬に侘ぬ鏡台七夕や　調和

星觀も合のかたと門月光　言滝

腕と傍へし天河にあらる天は　似雲

稗をなつ星光小川の鵜鳥　言水

玉階の秋食フラスコ涼　不卜

絵カルタや宿ぎり星乃書合　葦頂

床橋や詩ッと八宗派の星婚姻　其角

鬢の髪よりめられきも星光斗　小川水柳

無は対出るそ通あの星乃床　床宿

夫婦星や尾ひらの動き拝雲　松川

星の契り玉乳親や恋知らぬも　清風

西すやれそ
鳥兆華やとゞの星乃旅　慈居

稲妻

いなづまや田中井戸の玉まき　住木

刺鯖

さし鯖や四の戸隠乃埋し垣　遠見

墓詣

猿や夜の勧進墓詣　清風

灯籠

御所灯籠通ヅウや夫婦　一葉
灯籠の切ぬくもとも吉野紙　了静

魂祭放下ら袖も茶湯椀　清風

西瓜

鬼とみて立る形程こし山西瓜　不言
砂糖有わくらそ氷船西瓜　序眉

川船や中に峯入出崎菊風（表寄）　東水

鬼灯

鬼灯や女子の鼎の姿はこに　言雀

新蕎麦

時ちれや一株蕎麦に刈そえ切　近長

蘭

菊よ竹や玉ぬく蘭　立訓

秋草

茱萸や拥篠乱れ追風奥　一蜂

樝乃むかの時雨や　如柳

鶉白い筆起浦出羽刈実床　如船

青鷺や入野に落武士　客亭

女良花姿しや蛇のぬき　清風

虫

幽集へ入んと思よ

さこれ友六人の狛や毒虫　子雪

さへ望たかなの下と星きりくれ　千之

小溝に水はなれぬ菜玉虫　言滝

板のうへ押や餅屋が舩の月　光俊

丸読月を隠て懐かな　手之

先月見うるや宗祇の棚守　了静

月は雲水の皮むる常天津うせ　是㐂

月やゑまき妹の暁　正信

花名月　一[illegible]

草虫や殻（カラ）は干ざれ月　言水

さ浪や志めし出ぬ　田 兌雅

月や今宵寺村はすめる生禅豆　如柳

擬尼楊枝月や柊は草島ケ　風流

雁

大名の食や進は渡る雁　仙臺 三千風

一尾首やとるゝキセルの棹の小　南都文珠四郎 包元

初ハとまし原の浦で料理　序深

砧

京中に絹地の多城はなし風流　政次

打ぎぬや通ひくこはた名

鶯

借場も見ずに出て仏僧法　遊里

梅わさき

梅わさき田舎天神の詠々　房章

重陽　附菊

吞ぬ事や我ままに唐桜　了静

仙人の飲ぶつゝくしこ菊の淵　道亭

梅　附梅鮒

鉛ら酸漬の塩の組葉　友静

出渡やは葉陰と舍てず御庭　是上

焼餅や其上山の宅ふ梅　如柳

梅匂ひや梅と本の相合り　月静

梅ふき妖を茶房の富ぶれ　水容

狩人や紅葉踏分る冬の道　清風

見ぬ夜の深にや庭の紅葉鮒　京　貞恕

薬酒や杯ともし梅鮒　貞之

山桜あらし奥薗は跳る梅鮒　宗信

戀

女房待男の山や奥住居　宗喜

月や野なる遅くの出葉れいが　遊川

首

書尊や色ひるれみし若菜のく　一業

渡りくる

海は見ん世ゐるや今捷渡り物　南部　素之

雑

竜田姫ゆりくりきんお秋手桂之　三千風

水鏡の下将(マコモ)苺は実なるとや　和肘

秋の坂や唾(ツハキ)とく取鯉遣す　慈福

付にの酒は施あり夜かゝし　一当求

剃刀鮎旅人衆は落を濁川　大田 沈絡

匂ひ身をこ誰か合せる桔梗の秋　唯雪

尾花ねは切葉より飛まれ乗らこ　言返

秋暮

暮て見る秋の記念や萩の妻　捻川

下露の秋の露を遊女知まさり　申笑

虚労病の世は成ける秋の暮　也石

此集出家せし時を過し秋の暮　対州 緑葉

浮かれ眠る秋の暮　同 幽僻

色かへる蝶や名残の雁高し　水猿

以ろ物云や猫まで過し秋の暮　任口

刈跡も[illegible]濁川　[illegible]
白魚も[illegible]　[illegible]
[illegible]切暮れ[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

冬部

初冬

後五日宮札打や神の旅　不易　絶以

亡き人や顔まざまざと柿の蔕　清風

爐開

埋火や日夜経る按北爐　郁章

賢仁も手取らるゝ宝爐の道　吉立

膞膝バキやゝ火燵の鼾　里之丞　一栄

時雨

新わら小豆撰や片時雨　言水

茨名濁はせ瀧の遠雲　調和子

鳥の巣も風のさく板屋時雨　同

首まかせん笠縫の初時雨　西海

衣被や雲も川出る時雨　友静

木枯

凩や川音に遠き猿の耳　和礼　蘭吉

雪

雪のよは鳥も着ぬか浜松　言水

飛鳥も翔羽休めぬ雪の松　言滝

雪路や今は風の銚子川　如柳

物悦し山路細道下ゆく雪　正英

雪車引や勝切て有乳山　了挿

雪の牛

多と旧牛の子窓一里雪　言水

炭焼

黒炭焼や安達の鬼瓦　言流

筆炭や霜は枯野の山下風　言夕

炭焼や里見ゆ家有吉野山　清風

氷

大根や残りし汁に氷鮒　友陽

水鼻や継まほしき紙衣川　一中

頭巾　附 足袋

額綿帽子

草足袋や東京志津田舎侍　言弓

姑の恩や雲きる上のきぬ頭巾　清風

額綿や嵐のさえに繞やう　遊川

着類紙子や蘇る里城分る　府京

水鳥

履かぬ袖濡し中宮や湖の浦　言滝

浮寝の後は高足浮寝哉　竹蝉

求めけり枚直

素袍着し亀女や恨ミ奥兼備　蛸螺

鰒

何ニ捉鰒世挙て皆河豚汁　京　須也

火吹形ほし忘よハし河豚汁　了静

鰒網や茶一を三条通の乗物ちる　一巣

其汁乃樽拵すゝれや鰒もどき　光孫

甚香瓶を捨る後の鰒もとき　清風

杉焼

杉焼や三十一ケ箱傳之　友静

生海鼠

金凡鼠懐ニ宍握ル陸奥山　頑也

薬喰

毛蒲団や蝋ニ残る去子滝　和風

好ミくや肖ら眼かう薬食　一巣

薬喰や眼でかゝえ若筥　遊川

煤拂

煤掃や嵐乃内裏故居　黄吻

雑

勝や水葉湯くる玉たまき　如柳

毛穿踏や椿売うたふ炉の北面　重盛

草枯や睦椀まさ人の薮薬師　清風

節分

鬼はうちとの首尾豆を種として　松濤

善[illegible]

年暮や関の藤川清き船信叟　重政

餅搗さして日も暮は大晦日　清風

書出しや一寸も光陰吾あらぬ　西阿弥

寝て起て鯨売声を淋しさの果　丈九

底氣や山路越無盡をさくら
燒南齋乃毛留早嵐歟
嵐將そなき物に八重霧
手代返をめて里乃下風
わきくも脇勝の汗時如
度日暑雲て月抄傾く
後病忘夢ほ醒も床の禅
根太綫ちよ路八分かる草

鉄火箸尾先ら赤城らくり
キセル通らぬ順上乃濱
馬方の中まぎれ郎よ出る
竜灯備へ寺楼指ゝ
かれ親近縁の侶坐し左時
呑下やうき乃女気遠ひ
者判力わら氏堀を切ゝ出
侯の領収牛王き牧

蒜喰者候の水も有の秋
火候緒ゝ寄後淑山乃春
為看婦と岩がゝれ襌の雲
悪所は凱ゝ次横のよれ風
兵古兵は図ひ入を億陰陽子
雷瀲後携の延さ記れ嵐
葛絵ますゝ雪の也し消宿
宿下孫の零権食まもくるき

花には旅所を照し光寺
檜原城に樹出仏の城
常枯ハきさん九下まできさ
米佗羅磨く高圓乃山
管人形飛鳥の淵ハかまれとも
行燈太鼓の光には俤く
妹のむけ御命高臺の龍に
志葛に通ふ勝ぬ音頭

冬礼追ほきを持に月詣る
毛躰に成し中宿の三方
初婿と極楽の斬詣風兵て
死し風あん空定めまき
寅輩ハわカツト吐唖の雑
物詣の蠰米姨桧乃面へ
雑巾や麻の小花堂に波
搔筆志派蓍の世の勝

香隠に流伽の光り照らし遍く
及る手語文は切目ろ祢ら姫
八中耳上鼻と残そくありり
鼎か如如く隅の数うんえ
耳こうく次よ西隆し唐砂
僕く出羽の術とえて露
握り里吉兵衛越し大は
茶柏の初尾若野継禱

三

豪粉神四方漂流世に於いて紅
櫃事始山の無顔乃本母
瑠璃のやまけ出き乃史源
受風に此の新屋れ山
其子竟後裕の名の数さる
余鋒樹城人何めわ
簡守り仏教肉の跡浮て
小出生名あ序文錦て光瀧

玉姫や志鬼白鬼すくに新
鳥ゐねすとしふ向よう
山田守に借なれ宜く常城殊りて
巻笙やぬ婦の高もの老
くえん称よわ左わ程えや海あちら書
眼乃は春風の下に氷乃女（ハギ）
耳は水津まる風のまに吹
章え悔せ倫の高砂庵

新艘と朝の原と明ぬれ禊
左鼓を枕と吉野葛待
寺いとくの雲はあゐ乃遠きあ
積月の形の旨を清ふ神
評俵せ雲も室き誌捨て
脚立と式末なみら海は
背痛き様を清身そ礼を也
鼻血すれく度まのすまき月

夫楼銭村より出る世尊の葉、
前に山門寺院にかゝれて風
違他方縁の書もかきあへて
倣をきく言切し夫の羽衣
勝らはや縫はぬ行衣の枝
遅ひまきしれ篭乃営
不経に渡ましゝきし草始
紀多くの事多熱かまれ

名

後ち始めの付し古孤
阿弥陀の結縁握き銭まて
せうき秃んはくしの海綫く
なき人の墓ぬ無波のあら鴨
無名相の甚菜高く積りまて
梓まか原雪積れ乃米
石飛し法雇し各乃山崩えし
かちきる道の宿の下水

纔筆一の硯に無くてならんよき
西向れ其の玉川も里
婁牛乃足ゟ々の律僧ありて
蒔残宮に歓き一子屋
名ウ
りや善書きゝをかし残も枕
土橋なあし志安遊りき
大佛お宝蔵の薩に主別まし
糸抽お錦取く海し

高足跡役の行者や七墨
金剛童子の大西いまそ去
等の梅におぼ城羽よ出て
彼は赤ら末の浅黄縫の紋
いつとゟ使枝稲計小あ風
傳ん書ゝ去稲有もつや声れ
風ゟ浮寺音のゝ枯ゟ色る
出ヶ一の行残なや出とみん

ウ

友雁や菜摘の郷を遠去ん

嵩法師立まふ之いの湖

さゞ波やよる子の吹もて毎

そうちまんと潜かねはあれども

さし北そく究竟の道へ分まぎ

蛸の老てわ里毎をいかん

伸人々瑞のいふとも

家更ほえあをの比そ

ウ

廻てハ鬼一口のたゝかハれ

かさりの紅葉珠の玉を板

安房を渡の雲たかき寺

こゝに帰て風にて機織のまし

詠ミの蝶の夢を月ハ落て

之我まもち行けゆく方ゝ寄

喰ミ青き粧をけて守治の剣

霊位禅定門菩提院殿

敵味方水晶乃旗あけて
碁盤のうへは天地とそ礼
鳴神の腕まくり力瘤
流来の嬉しさきへ〻まや
芽の枝調布中間は無足道
拵らへん夢そ俺しき
小芝居に生れ付る由き次
相楻く主の衣麻肩山

三

綵札のもゝ流れて泉川
息災延命ちう波の有
猿猴乃御屋連の纏を腰に付
新ちかく之世の柱
手柄鄲く人好能聲い山みき
猫股と称せるの脚を乳ほ
彼岸ちと根太のうちれちやれ判
百味備ふれ蛤の空（カラ）

若坊焼亡の事なと詠やり
貌あまて残せる武衣午の場
ふに語へ出るへ折もきし
唐へ捨碇き海原の底
深く流の画艶の角さらん
講て始て後之空への札
行らかれ庚子眉セイ喨叔ヨ申別て
守八中申要蒸樓の窓

愛らん女あまあも我引てんる
小路は生ひの縁のかく見
男の同ノ桂冷気の夢乃やま
申きつらされ薄の下かえ
書我り住留子ひ人は朝の霜
初陸城人尾路の雲
柑精氷月ハ斬掃ヨかく輝きて
時粉青葉林風のこ息

右甫坊性急の乾坤詠やり
鋺あそよ磯ま武衣一千の場
太閤浪八丈島へ打出きし
磨く捨陸き海も京の底
極め流の西帳の角さん之
絵名岩姫る波空之の札
わらかわる庚子眉〔セイ吳〕飲よ下剣て
思ひ八ゆめ世蕊樓の主

三

当ちらん雨鏡主安き坂引ゑ候る
小路往きこひ人の倣のかく見
走る卯性陰気の書乃やま
立ちまきを乞ふ東の下かえ
示わ引何倍葺ひ人は朝の霜
右陸城介も尾路の雲
任精水伴八乾帰よかく焼きて
時形吾楽 秋風のさえ

三

甚さしや海きぬ春なる落葉かな
代野大中筒は住ゐまて
己れ水晩の儀乃名残かな
雑乃吸物目数経ぬるん
德咄の座傷を拵きたもれ
蛙騒ぐめく志ぐれ蓮ま
上銀妻容ぬれ宮に打ぬる教
見れしや生捨文聴ぬめ

三ウ

う時地方箒を見る番は猪飯
面風は待く上ほ方の事
曇が氏れ篠田の末ぬ狐の子
小豆飯ほまに過ぐ草
浅漬の京よろいま居
病上りのきかまくに倍
毛前團や優に擾は月読ぬで
エフ
寒壇者して嵐を遣く

波涯舎利書の空也やあまたらん
毎のよいさゝ天の相から
有徳僧はアサよまで二の袖は及んと
上下の宮や足柄の関
出文や岩のうけ道風まで
名
筆は付縄あ書乃力さ
鼻婦人数の眠り覚えんと
三 田舎へ寄の庚申待

社気寸白尿は但ものこ疾也
背骨拭は凡海土の構さし
蓋頭巾山あ方へ通へ刎さ
刃盃らしに仙人の女
夢想の霧の行相いかさ左
鷺の森の第一寸鳥る人
汲風は付起大事ともめは葉す
二 竜女は伴し格子上籠

眠くあく賓二まへよめ指きの影

見え侍りし稲ア王意

有て六道の辻通りゆく帝

古今集に秋の上風

名ウ

秋淋し猫のあくひは詠じ

葉もありて山の端處雲

蔦葉や鳩女の笛はなれし初

未折のまきもかいなの書

白あくる里の月うき別れ

銀座中宮まよひし　ゑね言

肥後彌後古梓庵もの兵

世上の笑ひ大和山城

本書の著者鈴木清風は我が郷土の生んだ俳人として又紅花大盡として廣く世に知られた人で、其の事蹟の研究は我が郷土にとつて時代相を深めるのに極めて大切なもの、やうに思はれる。

先づ俳人としての彼をたづねるなら、芭蕉翁が「奥の細道」の旅を思ひ立つた時已にその訪問を予定されたと言はれてゐる程で、著書としてはこの「俳諧一橋」「後れすごろく」及び「いなむしろ」等世に傳へられてゐる。しかし現在郷土に殘つてゐるものは一つもなかつたので、その所在を探すのにさへ数年を費したが、この「俳諧一橋」と「後れすごろく」の二冊は昨夏たまたま東京の某書店にあることを聞き、早速交渉したが、直段も余りに

本書の著者鈴木清風は我が郷土の生んだ俳人として又紅花大盡として廣く世に知られた人で、其の事蹟の研究は我が郷土にとつて時代相を深めるのに極めて大切なもの、やうに思はれる。先づ俳人としての彼をたづねるなら、芭蕉翁が「奥の細道」の旅を思ひ立つた時已にその訪問を予定されたと言はれてゐる程で、著書としてはこの「俳諧一橋」「後れすごろく」及び「いなむしろ」等世に傳へられてゐる。しかし現在郷土に殘つてゐるものは一つもなかつたのでその所在を探すのにさへ数年を費したが、この「俳諧一橋」と「後れすごろく」の二冊は昨夏たまたま東京の某書店に[illegible]ることを聞き、早速交渉したが直[illegible]し余りに

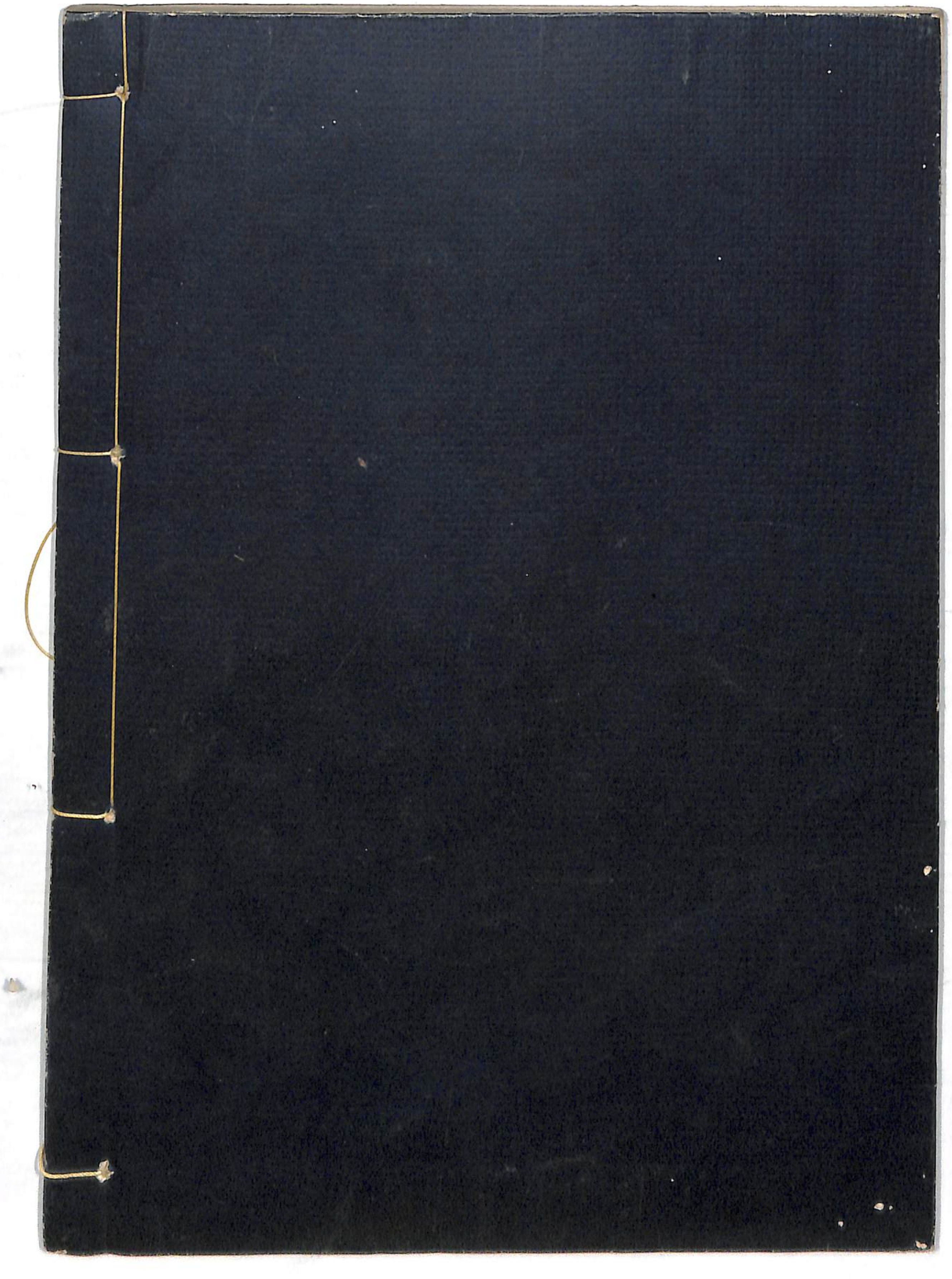
和學園 大阪 第6444號 受入 36. 3. 14

高價なので購入し兼ねたが、今春にいたり漸く經費の一部を町費一部を特志者の寄附金により小學校の備品として購入することが出來た。

近頃これをきゝ、右二著の寫しの頒布方を希望する同好の士が多いので、今回之を騰寫にし製本して實費で頒つことゝした。幸ひに其の道の參考となれば此の上ない幸せである。

「製本にあたる」書寫の勞をとられた鈴木藤之助氏及び尾花澤小學校職員諸氏に感謝の意を表する。

昭和十六年十二月

尾花澤小學校長

長井小四郎